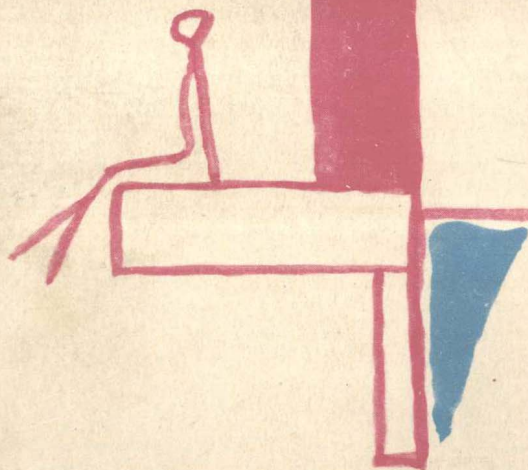


学・経・年・不問

城山三郎



経・年・不問

城山三郎

学・経・年・不問

昭和四十一年十二月二十日 第一刷

定価四百七十円

著者 城山三郎

発行者 上林吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

印刷所 大日本印刷

製本所 矢嶋製本

*万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

目次

一副課長見習	五
二 悲憤慷慨	二七
三 五百円メシ	五五
四 昨日の英雄	八五
五 初陣	一一一
六 銀座の釣り	一三九
七 出足好調	一七〇
八 波	一九六
九 乞食の商法	二二四
十 双眼鏡の世界	二五一
十一 必勝交響曲	二七九
十二 男ひとり	三〇六

装帧·田村孝之介

学・経・年・不問

一 副課長見習

伊地岡^{いぢおかざむ}勇の平凡なサラリーマン生活は、ある日、接待ゴルフに出かけているとき、崩^{くず}れ去った。

その日は、申し分のない秋晴れ。小高い丘陵地にあるゴルフ場では、まわりの木々が黄に赤にと色づき、いくつもの入江のようにひろがる芝生には、秋の日が隅々まで溢^{あふ}れていた。微風にのって、高らかな百舌^{もず}の声が流れる。

伊地岡は、長身で長細い顔。骨組みはがっちりしているが、まるで骨格標本であって、目方はない。濃い眉が目に取り、唇は厚い。目つきは鋭く、ゴルフ場へ来ても、獲物^{えもの}をねらう目

している。

それでも、その日はときどき目もとがほころんだ。

こんな佳い日、よくこそゴルフに——と、相手の銀行員たちに感謝したい気持である。

秋空を裂いて、ショットの音がひびく。

「いい日だなあ」

銀行員が思い出したように言った。ゴルフ場に來る途中から、何度も口にはしている。話題に乏しいせいもあるが、たしかに申し分のないよい日であった。

ビルの谷間で机にはさまれていたのでは、もつたない。しかし、といって、ゴルフ場の芝生の上に居ても、そのもつたないという感じは消えなかった。

ゴルフをしていても、もつたないような日。いったい何をすればそれに見合うのかとまどろような、それほどすばらしい日和というものがある。それは逆に言えば、人生には、まぶしいほどの内容がないということでもある。

伊地岡はつぶやいた。

「たしかにいい天気です。良過ぎるほどの天気です。こんな日には、えてして何か悪いことが起るんじゃないですか」

銀行員たちは笑った。

「あんたは心配性だな」

「いや、伊地岡君は何ごとも先へ先へ考えるタイプだ。証券会社は、それでなくちゃつとまるまら」

「伊地岡君は性急だからな。子供だってそうだ。三十歳にして一男二女ありとは、急ぎ過ぎだよ」

伊地岡は頭を掻いた。

「いや、それは思いがけず……。人生には、いつも思いがけぬことが起るものです」

早婚であつた。男の子が出来て、次に女をと思つたら、早産で、しかも、女の双生児であつた。伊地岡の氣持を汲んで、子供まで手廻しがよいと冷やかされた。

伊地岡は、高校しか出ていない。Bクラスの上位にある小鯛証券に入社。いまは本社の営業課長代理をつとめている。

課長代理は三人居るが、他は大学卒ばかり。伊地岡の年齢と学歴でそこまで来たのは、彼は人一倍せっかちで人一倍努力して来たからに他ならない。

「さ、それでは」

伊地岡はクラブを振り上げた。

「きみ、まだ早い。前に居る。また、どなられるぞ」

なるほど射程の距離内に、キャディをまじえて数人の人影があった。ひどくのろのろした一

行である。

伊地岡にひきずられ、走るようにして廻って来たのに、その一行の後に来て、ぱったり出足をとめられた。たまりかねて打ったところ、すでに二発、先方の足もとに打ちこんで、どなられている。

「おそいなあ、前の連中は」

伊地岡は足踏みした。ひとりなら、そこでのゲームはあきらめ、ボールを持って一つ二つ先のホールへ出てしまうところだ。

へノロマめ！

伊地岡の方こそ、どなりたい気持であった。短い人生に、何をのろのろゴルフをやっている！

しかし、伊地岡はどなりはしなかった。エチケツトの問題だけでなく、先行の組の中に一人、見おぼえのある男の後姿があったからだ。小柄で、まるまるした体つきの男である。

誰かがボールを右の谷間に打ちこむと、その小男は、まっすぐボールを追って、谷間へ向って行った。白シャツ姿なので、もう一つ大きなボールが谷間へこるがって行く恰好であった。小男はそのまま戻って来ない。

ボールをさがす時間は、五分以内ときめられている。

やがてその五分が経ったらしく、先行の組はしぶしぶ動き出した。

だが、谷間から小男は上つて来ない。声をかけながらも、一行は遠ざかつて行つた。

ボールに食い下つて棄権^{きけん}するなんて、何という執念深い男だろう。それとも間が抜けているのだろうか。何としても、苛々^{いらいら}させる男だ。ゴルフ場へボールを打ちに来たのである、拾いに来たわけではあるまい。ボールの一つや二つ。現に伊地岡は、安物だが、いつも一ダースのボールを用意して来ている。肥料代りに芝生へボールをばらまくくらいの気持でやって来ているのだ。

やがて、伊地岡の組がボールを追つて、その辺り^{あたり}を通りかかった。

伊地岡は、男の下りて行つた方角にふと目をやった。

芝生と谷の境に、標示がある。白地に赤い文字。

『マムシ谷——マムシがよく出ます。キャディにボールを探させないで下さい』

ボール拾いが仕事の一つであるキャディさえ下りて行かぬ谷間へ、あの小男は何故下りて行つたのか。よほど欲深な、それとも、しみつたれた……。その顔が見たい。

伊地岡は、谷間をのぞきこんだ。

そのとたん、すぐ足もとの櫟^{くもぎ}の葉蔭から、まるい男の顔が現われた。

男二人は、ぎよつとして顔を見合わせたが、次の瞬間、

「おい、のろじゃないか」

「勇みか」

高校時代の同級生野呂久作であつた。しかし、ノロはその姓からと言うより、のろ足から来た渾名あだなといつた方がびつたりする。

同様に「勇み」の場合、勇は本名なのだが、渾名はせっかちな彼の性格から来ているといつた方が正確である。

性格は一見対照的だが、二人は氣が合つた。のろはのろ足なりに、勇みは勇み足なりに、人生に夢中になるところがある。自分の人生だけを見つめる。自分のペースこそ、人生の時間だと思ふ。人一倍のんびり、あるいは人一倍性急で居て、ふつうの人間以上に自分たちをまともだと考えている。もちろん、二人は変人ではない。少々純粹というだけのことだ。

考えてみれば、世の中の人間は程度の差こそあれ、のろ足・勇み足の二種に大別されるのではないか。お尻をたたかねばならぬ人間と、ブレーキをかけられねばならぬ人間。びたり中庸ちゆうといつた人間は、居る筈もなく、またお目にかかりたくもない。

実社会に出てから、二人はあまり会うこともなかった。伊地岡の方は、高校卒業の半年前から証券会社につとめに出て居たのに対し、野呂は高校を四年まで修め、さらに大学でも規定よ

り一年ゆっくり勉強して、中堅の電機メーカーであるレヴェー電機へ入った――。

「どうした、まだボールをさがしてるのか。そこはマムシが出るぞ」

「そうらしいな」

「知ってるなら、早く上つて来い。それに、いつからゴルフをはじめたんだ。会社でいま何をやってる」

伊地岡はせきこんで訊く。野呂は、丸顔をなおまるくして笑った。

「そんなにあわてるなよ」

「ゴルフの途中だぞ。急がないと」

「ゴルフなんて遊びだろう。遊びを急ぐことはないさ」

「苛々するな、きみは。マムシに咬かまれたら、どうする。それに、おい、ゴルフのハンディいくつなんだ」

「おれは、ゴルフなんかやらないよ」

「どうして」

言いかけて、伊地岡はあわてて、

「それはいつか訊く。それより、ゴルフをやらぬのに、どうしてここへ」

「ついて来たんだよ、キャディ代りに」

そう言えば、小男はゴルフバッグを担いで歩いてた。いまだけは、キャディが先に持って行っているらしい。

野呂は何でもない口調で言ったが、伊地岡は愕然として聞いた。

「何だつて。もう一度、言ってみろ」

「監査役のお供だ」

「それで、大の男がおめおめと」

「いいじゃないか。芝生の上を荷物背負って歩くんだ。いい健康法だよ」

「きみは全くくさったな。我々の約束を忘れたのか。五十六歳こそ、人生の勝負」

「忘れはしないよ」

「それなら、なぜ、そんなことまでして上役の機嫌をとるんだ」

「そうじゃない。ただ、おれはあの白いボールを一日かかってもさがし出したいというだけさ。いまに監査役がどなって来るよ」

ちょうどそのとき、先の方から怒りを帯びた声が流れてきた。

伊地岡は、やきもきした。

「ともかく早く行けよ。おれが気が気じゃない。たのむから早く」

野呂は、おもむろに腰を上げた。

「それじゃ、きみの顔を立てて。ところで、先刻の五十六歳の件な……」

「あ、それはまた後でハウスでも……。おれはいま客を接待してるんだ」

銀行員たちはと、きよろきよろ見廻す。

「かわいそうにな」

「何を」

「そんな風じゃ、五十六まで保たないぞ」

野呂は芝生に出た。そこでにっこり笑うと、黄ばんだ芝の上をまるくなって走って行った。

「五十六歳、五十六歳……」

伊地岡は、歩きながら、つぶやいた。

いまは三十。まだ後、二十六年ある。気の永い競争だ。人一倍の努力が実を結んで、これまでのところは順調であった。出世の程度も、大学出に負けまい。

そう言えば、伊地岡はレヴュー電機の株を担当している。社長や専務、常務、関係の部課長とは度々会ったが、監査役から話を聞いたことは一度もない。ポンコツで廃用萎縮がはじまっているような老人を相手にしているなんて、野呂はうだつが上らぬようだ。

へおれの方がまだしも――

そこまで考えて、伊地岡は苦笑した。

考えてはならないことであつた。小さい、小さい。

野呂と伊地岡は、誓い合つた。

出世なんて、つまらない。少くとも、目先の出世は、誰が先に課長になろうと部長になろうと、知つたことではない。少くとも、それを天下の一大事と考える人間にはなりたくない。

問題は五十六歳。つまり、誰にもいや応なくやつて来る停年後のことだ。そのとき人間として満ち足りた状態にあるかどうか。そこで勝負しよう。それまで一流会社の部長といばつていた者も、五十六歳の名刺には、どんな肩書がついていることか。重役になつておれば、一応、停年から外れるが、だからといって幸福と限るまい。前には社長のポストへの衆目にさらされての激烈な争いがあり、後には孤独がある。

五十六歳——人生の秋のはじまりである。しみじみした人生がそこからはじまる。それまでは気づきもせず走り通してきた人生、他人のものであつた人生が、向うから胸にころげこんで来る。

かつて一年早く部長になつた、そのため失つたものを思い返して突然といふことになるかも知れない。仲間を失くしたこともあれば、いわゆる小市民的幸福を失うこともある。おれはいつたいどんな仕事を残して来たのかと、にがい思いを噛みしめようし、生甲斐さえ見当ら